

傷寒論 各条の解説

太陽病

第1条 太陽之為病、脈浮、頭項強痛、而惡寒。

(注：句読点は原文にはなく、筆者の独断で勝手に打ったもの)

お約束通り、ここから「康治本傷寒論」の本文を読んでいく。全部で65条しかない。

(意識：これも筆者が独断意識した)

第1条 太陽が病むと、橈骨動脈の脈は、医者が軽く触れただけで脈拍を触知できるほど浮いていて、頭痛を訴え、後頸部の筋肉がこわばるといふ。しかも悪寒がするものだ。

ちょっと意識しすぎただろうが、漢方の初心者にはこれでも十分難しいかもしれない。けれども次第に慣れていくはずだ。

太陽之為病

いきなり「太陽之為病…」なんていわれても、普通は面食らう。傷寒論がいきなりこんな書き方をしているところをみると、「これくらい常識だろう」という書いた人の独りよがりではなくて、やはり当時の人(医者)には「あ、太陽病の

オハナシね」と十分通じたのだろう。

この当時、すなわち西暦200年頃には医療というものはすでにあって、ある程度のレベルにまでは達していたはずで、すでに理学的所見と病気との関連について、データというか経験が蓄積されていたのであろう。もちろん傷寒論も、野原に超高層ビルが忽然と出現したようなものではなくて、これ以前にも似たような書物などがあって、そこに傷寒論が登場し、傷寒論からまたいろんな書につながっていく、と考えるほうが自然だろう。趙開美本の序文には、張仲景がいろんな本を参照して傷寒論をまとめたようなことが書いてある。傷寒論は史上初の漢方書でも何でもなくて、医学の歴史を鉄道に喩えれば「途中停車駅にしては大きかった」みたいなものだろう。

さて、だから「太陽って、あのお天道様が病気になったのか？ 日光を浴びると太陽病になるのか？」という疑問は出なかったのだろう。ちなみに私は、初めて「太陽病」と聞いたとき、日光過敏症か何かのことだと思ったくらいである。

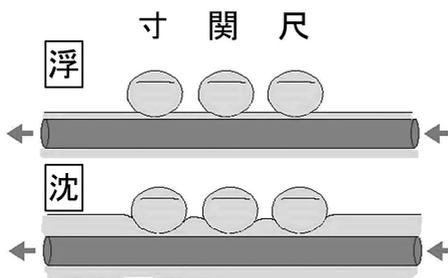
ところで、前に書いたように、傷寒という病気には進行具合によって6段階（太陽病・陽明病・少陽病・太陰病・少陰病・厥陰病）あって、その第1ステージが太陽病なのだ…というのは実は大して重要なことではなくて、本書の最後まで目を通せばわかることだ。

話はいきなり脱線するが、教科書を7回読むだけで東大に合格し、司法試験にも一発合格したという女性弁護士の話思い出した。その方の教科書の読み方だが、一文一文丁寧に読むところから始めるのではなく、まずはザーッと見出しだけをみていき、全体はこれくらいの分量でだいたいこういうことが書いてある、くらいのもをつかむのだそうだ。これが1回目。これをあと6回繰り返すうちにスピードがアップして、記憶や理解が定着していくのだとか。他でも紹介されている速読法の一つだろうが、康治本傷寒論だと65条（というか65個の短文であるが）をいきなり精読してはいけない。まずザーッと目を通す、これがよい方法だと思う。筆者はざーっと書くわけにはいかないので、いちいち文字で埋めていくが、康治本は速読も何も、前に示したように全文が見開き一平面に収まってしまうのだから、これにホントに目を「通す」のだ。何回も。

脈浮

話を戻すと、「何でいきなり脈が出てくるんだ？」という疑問が出るはずだ。これは、昔は医者が患者を診るときにはまず脈を取ったためだろう。それだけである。

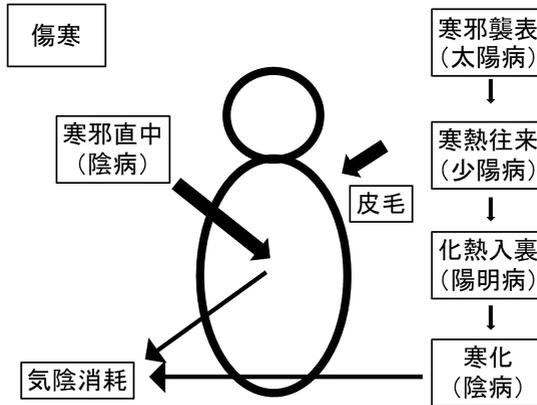
さて、その脈は「浮」というからには、その対極にはもちろん「沈^{ちん}」があるのだが、触れただけで脈がわかるのを浮、触れただけではわからないので、ぎゅーっと指を沈めてわかるのが沈というわけだ。こんなのはたぶん当時は一般人でも知っていたくらいあたりまえのことだったのであるから、いちいち書かれていないのだ。こんなことまで書いていたら、当時は紙が貴重だったから、木簡に書かれたと考えると、本自体が重くなって大変だっただろう。



漢方、とくに傷寒論的急性発熱性疾患の考え方とは、「外から“邪気”が体表に取り付くことで始まり、“邪気”が徐々に体内に侵入することで進展・悪化していく」というものだ。患者の脈が浮脈というのは病がまだ体の浅い位置（体表）にあることを示しているのだ、と昔の人は考えたのだが、実際に起こっている現象とは矛盾しない。これに対し、沈脈は病が体内の深い位置にあることを示す。つまり感染症が進行し、邪気が体内に深く侵入した段階の脈ということである。いずれも、現象をくまなく観察して導いた結論だから、そう考えておいても困らないのである。

頭項強痛

次に「頭項強痛」とあるが、頭痛がし、後頸部の筋肉がこわばる。感冒のとき



に頭痛や肩こりなどがよく経験されるのがこれである。頭、項は部位の名前だ。では「頭項が強痛する」のか？ 頭から項にかけて強く痛むってことか？ あるいは「頭が強して項が痛する」のか？ 項が痛いのはわかるとしても、頭がこわばるってどういうこと？ …これは、本当は頭痛・項強がともにある状態なのだろう。昔の中国語ではこのような書き方をするらしい。

而悪寒

この辺まで読んでくると、「ああ、太陽（体の一部分としての）が病むと、現在の感冒みたいな症状を起こすんだな」とわかるであろう。感冒様症状だ。でも実際に感冒かどうかはわからないから、現代の医師は舌圧子を患者の口に突っ込み、ペンライトで扁桃を照らしてみたり、綿棒を患者の鼻に突っ込んで迅速診断キットを試したり、採血や検尿などいろいろ検査をしたりする。その結果、感冒様症状だけでも伝染性単核球症だったり、溶連菌感染症だったということがわかって、治療が異なってくる。

さて悪寒だが、ウイルスや細菌などの病原体が体内に侵入すると、これに続くサイトカイン分泌で発熱機転が開始し、筋で「ふるえ熱産生」が起こる、これが悪寒→発熱の本態だと現代医学では認識されている。ただ漢方では、ウイルスや細菌という概念がまだなかった頃に発展したので、悪寒という現象を、“自然界に邪気というものが存在し、種々の邪気のうちとくに寒の性質をもつものが人間

の体表に取り付いた結果”と考えたのである。素晴らしい観察力だ。今だってウイルスや細菌は肉眼ではみえないのだから。而は接続詞である。

悪寒のない感冒というのも、実はよくある。喉が痛いと思っていたら、カーツと暑くなって、体温を測ってみたら何と38度を超えている…というタイプだ。小生が風邪を引くときは悪寒がするほうがむしろ少ないのだが、そういう「ただ暑いだけで悪寒なし」の急性感染症の一群を、漢方では温病^{うんびょう}という。傷寒論は、この後にも述べるように、経過中に必ず悪寒がするタイプのみを取り扱う。傷寒論の時代には温病のほうは残念ながら深い考察がなされていなかった。「それじゃ困るよ」という人たちが、傷寒論が世に出て1,000年ほど経ったときに現れ、温病学というものが発展していったのだ。

(補) 温病

現代の日本ではなぜかあまり馴染みがない分野だが、中国では傷寒論と温病学とは並立しているくらいだ。このように、傷寒論は、急性感染症のうち温病を除いて傷寒(と中風)を扱う、ちょっと偏った本なのである。

それではその温病については“温病論”みたいなものがあるのか、といえば、ない。いろんな人がいろんな本を書いているが、有名なのは葉天士^{ようてんし}の「外感温熱論」や呉鞠通^{こきくつう}の「温病条弁」などである。

第1条は、まとめると、

	脈	頭痛	項強	悪寒
太陽病	浮	○	○	○

というわけだ。理解の助けになると思う。

第2条 太陽病、発熱、汗出、悪風、脈緩者、名為中風。

(意識)

第2条 太陽病、すなわち脈浮・頭痛・項強・悪寒があるもののうち、悪